

親鸞伝説の性格と意義

——正聚房僧純編『親鸞聖人靈瑞編』を中心として——

菊 藤 明 道

はじめに

本稿は、親鸞聖人六百回大遠忌の文久元年（一八六一）に本願寺派の正聚房僧純（『妙好人伝』の編者）が編集版行した『親鸞聖人靈瑞編』を中心に、文献研究とフィールドワークによって親鸞伝説の性格と意義について考察したものである。

一 『親鸞聖人靈瑞』の内容と性格

『親鸞聖人靈瑞編』（一卷本。龍谷大学図書館蔵）には、親鸞伝説二十九話と『臨終奇瑞論』が収められ、明治十年（一八七七）中山令純によって補刻版行された『親鸞聖人靈瑞編』（二巻本。国立国会図書館蔵）には、上巻に『親鸞聖人靈瑞編』（一卷本）が収められ、下巻に付録の四話を含め二十三話収められている。計五十二話である。伝説の中には『本願寺聖人親鸞伝絵』『高田開山親鸞聖人正統伝』『親鸞聖人正明伝』や、『大谷遺跡録』『二十四輩順拜図会』などから採ったと思われる話が

見えるが、編者僧純が現地に赴いて集めたものもある。

本書には、真宗高田派本山専修寺、真宗佛光寺派本山佛光寺、真宗木辺派本山錦織寺、真宗浄興寺派本山浄興寺、その他真言宗善通寺派総本山善通寺、浄土宗法然寺などの他宗の寺院、さらに鹿島明神・箱根権現など神祇と関わる親鸞伝説も収められている。そのうち、二一「高田専修寺 下野国高田」と二二「三尊仏 専修寺靈宝」は、栃木県真岡市高田の高田派本寺専修寺の草創伝説であり、親鸞が善光寺で授かったとされる一光三尊仏の話は、平松令三氏が『親鸞の生涯と思想』（吉川弘文館）で史実とし、明星天子（本地、虚空蔵菩薩）の霊告、すなわち聖人が大内庄柳島で大石の上に坐して念仏を称えながら夜を過ごしていると、明星がまさに出ようとす

る時、一人の童子が現われ、柳の枝と菩提子を授けて「自分は虚空蔵菩薩である」と名乗り、この地が伽藍建立の適地であることを告げた話について、平松氏は、「専修寺創立にあ

親鸞伝説の性格と意義(菊 藤)

て取り込んだ結果」であり、「そこへ親鸞の念仏の教えが入り込んできた」と述べ、伝説に史実が鑲められていることを指摘している。

二 「身代の本尊 雲州神谷氏」について

『親鸞聖人霊瑞編』(二巻本)の二五「身代の本尊 雲州神谷氏」の話は、先行の仰誓編『妙好人伝』(二巻本)の第二巻に「出雲松江大夫神谷氏祖」として収められ、さらに僧純編『妙好人伝』第三篇巻上にも「雲州神谷備後」として収められている。

『霊瑞編』の「身代りの本尊」の記述は次のとおりである。

身代之本尊 雲州神谷氏

出雲国出羽守殿の家老に神谷備後といへる人あり。禄三千七百石代々浄土真宗にて同所順光寺の門徒なり。その先祖神谷源五郎といふ人、十六歳のとき、主人直政公にしたがひて大坂陣に拔群の働きありし人なり。此源五郎の母儀は、ふかく弥陀の本願を信じ、常に報恩の称名おこたる事なし。ゆへに源五郎も若年のころより同く深信念仏す。或日、敵方より打たる鉄砲、源五郎の胸板にあたりけるに、すこしも傷事なければ、奇異の思ひにて陣屋にかへり、御本尊を拝すれば、不思議なる哉、絵像の御胸の真中より血しほ流れて在ませり。諸は勿体なや、我を助けんためにとて身代に立たまふやと感じて礼拝尊敬せらる、事かぎりなし。夫より弥まして御法義を大切に喜ばれしとなん。よて、今に至るまで身代の如来と名づけて神谷氏の霊宝なり。顕如上人の御裏の御本尊な

り。他の家中には門札の簡を張り、正月には注連縄門松をかざるに、神谷の家にはさらに其儀なし。是ゆへに出羽守不審に思はれ、「何故爾るぞ」と問給ふ。神谷いはく、「私は浄土真宗の檀越に候ふ。これ即ち宗風なり」と申上られしかば、殿ももつものよしにきこし召れ、今にかはらず宗格を如実に守られしなり。即ち、予も弘化年中より彼地に毎度いたりて親しく見聞せしま、を記し侍りぬ。

右の文には、絵像の霊瑞伝説とともに、真宗の教えや宗風も記されている。

「身代りの本尊」は、調査の結果、島根県松江市の神谷家第十四代神谷昭孝氏宅に鎧兜とともに伝えられていることが判明した。神谷家の寺、松江市石橋町の浄土真宗本願寺派順光寺には、「身代りの本尊」について記した『松湖禄』があり、『順光寺史』にも見える。

三 「川越の名号 越後浄興寺霊宝」について

『霊瑞編』には、親鸞が法難で流罪になった越後に生まれた「越後の七不思議」(①逆竹②川越名号・片葉の葦③焼鮎④繋ぎ樵⑤八房の梅⑥数珠掛桜⑦三度栗)も収められている。

「越後の七不思議」については、宗誓が宝永八年(一七二二)に刊行した『遺徳法輪集』(『真宗史料集成』第八巻、所収)の巻一に「川越の名号」が、巻二に「逆竹」「八房の梅」「三度栗」が見え、先啓が明和八年(一七七二)に刊行した『大谷

遺跡録』卷二(同)には、「歎喜山淨興寺記(川越の名号)」「扇谷山淨福寺(川越の名号)」「上野原の三度栗」「小島の八房梅」「鳥屋野御旧跡(逆竹)」が記されている。さらに、了貞が享和三年(一八〇三)に刊行した『二十四輩順拝図会』卷四(同)にも、「川越の名号」「柿崎扇子屋ノ旧跡(川越の名号)」「三条西養寺(繋ぎ榎)」「逆竹の藪」「北山淨光寺(逆竹)」「三度栗」「焼栗山孝順寺」「八房ノ梅」として記されている(「逆竹の藪」の記述の末尾に、「土俗越後の七不思議」として、火井・油池・逆竹・三度栗・八房ノ梅・弘智法印・鎌鼬が記されている)。大正十二年(一九二三)刊行の田面欽爾著『親鸞遺跡巡礼紀行』(大阪・親鸞欽仰会)には、「片葉の葦」「逆竹」「三度栗」「川越の名号」「八房の梅」「繋榎」「焼鮒」が記されている。

こうした「越後の七不思議」の伝説について、新潟市西蒲区曾根の浄土真宗本願寺派一心寺の住職で郷土史家の田子了祐氏は、「七不思議というのが、単に不思議ということだけでなく、越後の中世初期真宗の拠点であった場所が七不思議の由緒を持つ所であると考え」と述べている(田子了祐著「真宗の展開―親鸞の七不思議を通して―」〔両川今昔物語懇話会編〕『両川地域学・両川今昔物語Ⅱ』新潟市曾野木地区公民館、平成十八年九月発行、所収)。

『親鸞聖人霊瑞編』(一卷本)の八「川越の名号 越後淨興寺靈宝」の伝説は、親鸞が越後(新潟県上越市)国府直江の

一老婦の願いにより、筆で空中に六字の名号を書くと、対岸で老婦が掲げ持つ白紙に名号が現れたという伝説である。

川越の名号 越後高田淨興寺靈宝

そもそもこの川越名号の由来は、高祖聖人、国府に居住ましませしとき、直江といふ所に夫婦の信者あり。或とき、老夫、国府に参詣するに、聖人は下越後に行んと欲したまふ事を帰りに妻女に告ぐ。妻、御暇乞のため、且は、兼てよりの願ひもありとて則ち彼にいたれば、聖人はもはや御発足なり。即ち御跡をしたひ、漸く往還の川端にて追つきたれども、聖人は己に川を超えたまひしゆへ、後より声をあげて御名残をおしみ、兼て御形見を願ひし事を申あげければ、聖人仰せられてのたまはく、「婦人の身として川を越べからず。望にまかすべし。夫にて紙を開くべし」との玉ひて、即ち聖人筆を染てかき給へば、不思議なるかな、紙上に名号明にあらはれ玉ふ。老婦は奇異の思ひをなし、押戴きて喜びしとなん。之を川越の名号といふ。彼の夫婦の子孫、代々うやまひ奉るところ、終にその家断絶して当院の靈宝となれりとぞ。

老婦の心に念仏の教えが確かに届いたことを伝えるものであろう。

上越に伝わる「川越の名号」に対し、下越に伝わる「川越波切の名号」は、それとは異なる伝説である。

新潟市西区小新的浄土真宗本願寺派万榮寺の「波切分御名号署縁起」には次のように記されている。

波切分御名号署縁起

段上御厨子ニウチニ敬ヒ奉ル一幅ハ、見真大師ノ御直筆一天四海

親鸞伝説の性格と意義（菊 藤）

ニ比類ナキ波切分ノ御名号ト敬ヒ奉ル。抑其濫觴ヲ窺ヒ奉ルニ、各々兼テ承知ノ通り、吾祖聖人ハ無碍光仏ノ化身トシテ御影ヲ濁世ノ濁水ニヒタシ、分段同居ノ塵ニ交リ、専ラ西方ノ要路ヲ示シ玉フニ、凡ソ繁榮宗門ニ秀テ貴賤上下ノ隔ナク是ヲ尊重セサルハナシ。然ルニ木諸林ニ秀レハ風是ヲ碎ノナラヒ、南都北嶺ノ憎ミニヨリ、或ハ弟子ノ□ニ依テ、頃ハ人皇八十三代土御門院の御宇、承元元年丁卯三月流罪ノ宣旨ヲ蒙リ、配所即チ越后国国府ニ下向在シケリ。二人ノ御弟子ヲ召ツレテ知ラヌサヒシキ配所ノ住家、物ノアハレノ其中ヨリ、諸生化益ヲ力ニ思ヒ、全国蒲原郡弥彦ノ庄鳥屋野ノ里ニ於テ三年余リモ栖居シ玉ヘシ折柄、日々夜々ノ御化導ハ菅ノ小笠ニ紫竹ノ杖、ココナ尋ネカシコチ問ヒ召モ習ハヌ御艱難、青燈霜雪ノサムキ夜も九夏三伏ノアツキ日モ、更ニ御厭ヘ在マサス。御身ノ難儀モ顧ミス御化導在マセシ折柄、或日晚陰ニ及ヒ、天俄ニカキクモリ、強風シキリニ雨ヲ下シ、足ヲ早メテ杖力アセヲミソロニ御開山、角田ノ村迄御出遊ハシ、其ヨリ向ノ鳥屋野迄六里余丁ノ大渡リ。時ニ平島新十郎、風雨ノ難ニツイコメラレ、渡リ待場ニ忍居ル。御弟子下間蓮位房、新十郎ニノ玉フヤウ、吾等向フノ鳥屋野ニテイオリヲ結フ者ナルカ、ハカラス急ノ難ニアヒ、殊ニ日モ晩景ニ落カ、リ、如何共詮方はナキニ付、タイキナカラ一舟越テ玉ハレト泪ソソロニ願ハレケレハ、邪見无法ノ新十郎ノ申スニハ、角ナル程ノ荒波ニ六里余丁ノ大渡リ、吹キ来ル風モツケレハ心元ナク越難シ、命有テノ物語ト波ヲ詠テヲソレケル。時ニ聖人ノ玉フヤウ、予カス、ムル六字尊号ノ高德ニ依テ聊カ障リ无之故何卒渡テクタサレヨト、ヌレタル笈ノ其中ヨリ筆ト硯ヲ取出シ、急キ名号ヲ書キ玉ヒ、其名号ヲ棹ノ末ニハサミ舟ノ表ニヒルカエシ、吹キ来ル風モツケレハ、命ヲ限り魂限り櫓櫂ヲ以テコキイタス。アハレナルカナ御開山、自ラ棹ヲモ

タセラレ、称名ノ声諸共ニ波切分ヨトノ玉ヘハ、嗚呼不思議ナルカナヤ、サカマク水ハ左右ニ分レ、波ハ跡ヲオイ、ワツカ一時タ、又間ニ、ユメニユメ見ル心地シテ、難ナク鳥屋野ノ里ニツキニケリ。カ、ル不思議ヲ見ルヨリモ、放逸无懺ノ新十郎モ、是ハ是ハト驚キケル。時ニ聖人御悦ヒノ余リ、右ノ名号ヲ亭主ニ賜ル。是ニ依テ世ニ伝テ波切分ノ御名号トモ川越ノ御名号トモ敬ヒ奉ル。其ヨリ代々御尊敬申セシカ、カ、ル不思議ノ御靈宝、懈怠ニ御安置申テハ、重々ヲソレ多ケレハ、幸ヒ隣ノ庵ヲ頼ミ、長久ノ御敬ヲ願ハント、観応元年七月六日直チニ当山ヘ寄付ニ相成、其ヨリ万榮寺垣生ノ庵ニ御敬ヒ申セシカ、故アリテ永ク秘仏ニ致シ置候。然ルニ明治二十四年五月二十五日更ニ縣廳ヨリ再三取シラヘニ相成、直チニ政府ヘ届出シニ相成レハ、四方同行聞及ヒ、拝礼遂ル門末ハ、喜悅ノ泪ニムセハサルハナシ。然レハ各々祖師在世ノ昔ヲシタイ、御苦勞大悲ノ御化身ト存セラレ、称名諸共ニ謹テ拝礼ヲ遂ラレヨ。

小新村

波切山万榮寺

また、「川越波切の名号」を伝える新十郎の末裔・鈴木家に伝わる「平島川越波切御名号由来記」にも、親鸞が布教を終えて鳥屋野へ戻る途中、強風で川（信濃川）が荒れた時、紙に六字名号を書いて船頭の新一郎に与え、新一郎がそれを船の舳先に掛けたところ風波が治まって無事鳥屋野に着いたという伝説が記されている。

このほか新潟県燕市杉名の真宗大谷派極成寺には「川流れのご真影」と呼ばれる親鸞絵像が伝えられている。「川流れ」

とは水死人のことであり、洪水で行方不明になった者を搜索する時、舟にこの絵像を奉持して行くと、死体が水没している地点で舟がピタリと止まり水死人を収容できたという伝説である。この「川流れのご真影」の伝説について、田子了祐氏は、「洪水と苦闘をつづけた低湿地帯の真宗門徒の姿を如実に示すものであるまいか」と述べている（田子了祐著「蒲原開発の原動力となった真宗門徒」〔山田源行編『郷土史事典・新潟県』昌平社出版、昭和五十四年刊、所収〕）。伝説には、その土地の状況や人々の生活があったことが知られるのである。

四 「蟻巻の名号」と「木子山十字名号之縁起」

名号の靈瑞伝説について、『靈瑞編』（一卷本）の一四「蟻巻の名号」の伝説を、それと関連する新出史料「木子山十字名号之縁起」（京都府宮津市字小田・浄土真宗本願寺派教念寺蔵）によって窺ってみたい。

『靈瑞編』の「蟻巻の名号」の記述は次のとおりである。

蟻巻之名号 丹後佛性寺支配

この蟻巻の尊号の来由は、丹後国宮津の城下より三里ばかり北の方なる山中に、木子・木枕といへる両村ありしが、昔平家没落のみぎり、五郎・十郎といへる旗持役の者、この地に密に陰居しが、其後都にのぼりて（親）鸞聖人の御弟子と成て法名を敬念・唯念と授り、その節、御染筆の九字の尊号を賜りて国本へかへり、御法義を両村の者へ勧誘せしに、村民等、「仏が貴ひ」といふもあり、

親鸞伝説の性格と意義（菊 藤）

「神が貴ひ」といふもあり、互に争ひけるととき、長たる者いへるやうは、「村下の川へ名号と神とを流して奇瑞の顯たるを崇むべし」と約して、夫より川の中へ名号の箱と氏神の小社とを流せば、小社二箱ともに下へ流れゆき、名号の箱は一丁あまり上の岩の岸まで折り給ひければ、一同「是こそ勝瑞なり」といひて随喜いたし、夫より御名号の箱を取上みれば、不思議なるかな、箱の下に数万匹の蟻集り居て守護の跡に見えけり。夫より蟻巻の名号と称したてまつる。右二社の小社は、三里ばかり下の村に居候神となりて、今に其地にあり。その後、両村には氏神なし。依て、祭礼のときは、道場の前にて太鼓を打つのみ。然るに、百年以前に大凶年の砌り、抛なく宮津の大津屋何某に名号をあげ、金五拾兩を借しが、その後、約定の日もすぎ、兎角して金子を調べ、「御名号をかへし呉候やう」と頼みけるに、質主申すやうは、「はや佛性寺へ寄付せしことなれば、彼寺へまいり直に相談あるべし」と云。夫より同寺へたのみ申せば、住僧の答に、「其方共の檀那寺は丹波国の野花村の敬念寺なり。夫をはなれて此方の門徒とならば、望に任べし」と難題を申さるるにつき、是非なく畏りて敬念寺にゆきて右の趣きをのべ、段々歎きかなしめば、同寺も氣の毒におもひ、寺送りを認めわたす。夫より佛性寺へ差し出して尊号を授りて帰りければ、両村のよろこび驚るにものなし。又、御名号の折りなされし処の岩に、右の名号を彫付てありければ、其辺七八里の他宗門の人々、「祈願せばその益あり」といひて信仰かぎりなし。予、先年彼地にいたり、親く見聞せし儘を記し侍ぬ。

右の「蟻巻の名号」の伝説に関する史料として、京都府宮津市字小田の浄土真宗本願寺派教念寺に「十字名号軸」「木子山十字名号之縁起」「蟻巻名号縁起絵」「教念・祐念絵像」

親鸞伝説の性格と意義(菊 藤)

が伝わっている(平成十七年七月一日調査)。

「木子山十字名号之縁起」(巻物一卷)の記述は次のとおりである。

一丹後之國於與謝郡之内木子山之 為住物親鸞聖人御真筆 十字之名号山中 今年承応貳季迄 木子山村ニテ土民共 斯名号尊ム事 今七代ニ相当レリ。厥根元尋ニ 古エ讃州八嶋ニテ 源平両家之闘ニ 被打漏タル平家之一類矢野兄弟 五念寺ト謂深山ニ 五年之間隠レ居ル。斯深山ハ人倫絶テ冬春共ニ 雪深ク嵐嶮タダシキ嶮嶮タリ。故ニ矢野兄弟之籠リシヨリ 申始テ謂ヒ伝 五年寺山トハ号シケル。漸漸弓矢モ納リテ 世モ静謐ニ成ヌレバ 矢野兄弟モ安堵シテ 五年寺山之大木ヲ 思之俣ニ切払ヒ 少之家居之厥外ニ 築地ヲ構門ヲ建 木戸ヲ並テ朝夕之 煙ヲ立ルモ人不知。無程五年之居所ヲ歷テ 有時下人ヲ麓マデ 差下シタル有様ヲ 瀬屋ノ村ヨリ視出テ 不審ヲナシテ隣郷ヤ 縁郷マデモ催セバ 即時ニ軍平引具シテ 五年寺山ニ取掛ル。サレドモ寄手ハ大勢ナリ。五年寺山之籠テハ 矢野兄弟ノコトナレバ 讒之人數デ闘ノ 可成事トモ思ハスナリ。頓テ俗名名乗ツツ 降参申ス下ヨリモ 手ヅカラ髪ヲスリ落シ 矢野某シヲ改テ 兄ヲバ教念 弟ヲバ祐念坊ト名付テ 五年寺山ヨリ落墮シテ 同ジキ山ノ続ナル 木子小枕ノ両山エ 引被分テ教念ハ 木子ノ林ヲ切払ヒ 茅屋ヲ構今更ニ 土民ト成テ田畠ヲ 令自作テ日ヲ送ル。偕祐念ハ、小枕ノ山ヲ像鋤鉄ニ 携リツツ程ヲ歷テ 經營暮ス折柄ニ 国ニ疫癘發起シテ 人民不死ト云事ナシ。人間愁ノ憫ニ 神子隱陽ハ扱置 仏神マデニ祈誓ヲス。サレドモ厥甲斐ナキ所ニ 教念祐念兩人ハ 未正念タガハネバ 不思議ノ事ト思付 兎角田舎ニ交リテ、斯大病ノ平癒ハ 有之間鋪ト心底ヲ 唯一筋に究メ 上洛ス

レバ宿縁之 引合ニヤ親鸞ノ 堀川辺ニテ七日之 法談ナサルル厥御座エ、参詣申聴聞ス。一日二日ト思エドモ 聞程殊勝千万之 御勸ナレバ教念モ 心肝膽ニ銘ジツツ 三日三夜ノ御説法 一心不乱ニ聴聞シ 右之俗名名乗立 御自筆望心コソ サナガラ平家之子孫カト 聴衆モ是ヲ感ジケリ。斯有様ヲ聖人憐給ヒ慈悲ヲタレ 御筆ヲ下シ厥俣ニ 十字ノ名号被遊 是ヲ一代念ゼヨト 祐念坊ガ手ニ渡シ 兄教念ニ給レバ 斯名号ヲ申シ請 即座ニ御礼惶而 申上ルト木子山エ 帰山ヲイタス心根ノ 嬉シキ事ハ惡龍ノ 雲ニ登レル心地シテ 木子山ニコソ帰登スレ。未低臥ス病人ニ 斯名号ヲ以戴ス。今ヲ末後ノ煩モ 斯名号ノ功力ニテ 本復セザルト謂コトナシ。厥時マデハ木子山ニ 往古ヨリノ氏神ニ 備エ祭レル両社有。既ニ在家エ追下シ 十字斗ヲ礼拝シ 山之宝ト祝籠 末類マデモ名号ヲ 信仰セント問答ス。有繋ニ婀娜キ教念ガ 批判ノ程コソ殊勝ナレ。今各ノ難病ヲ ノガルコトモ名号ヲ 礼拝申ス奇特ニテ 両社ヲ所ニ置マシテ 諍ヒナスモ弁エノ ナキ故ナレバ愚智ノ身ト 思ナガラモ神妙ナリ。サラバ奇瑞ノ有方ヲ 今ヨリ山ノ主ゾト 備エ申サン印ニハ 斯山中之川裙エ 両社ノ宮モ名号モ 流シ玉ヒテ川上エ アガラセ玉フヲ真鉢ニ アガメ申テ木子山ニ 末孫マデモ伝エント 下川ニ持出テ 名号社モ川スソエ 流スト否名号ハ 次第々ニ水上エ ノボラセ玉フヲ厥時代 土民ハ新ニ靈驗ヲ 仰ギ尊ミ末世迄 斯名号ヲ尊敬ス。サテ木子山ノ氏神ノ 社ハ程ナク川裙エ 水ヨリ早ク流レツツ 本庄浦ノ続キ成 上野ノ岩間ニ留レバ ソレヨリ以前ノ四社神ニ 木子ヨリ流ルルニ社添テ 今ノ世マデモ上野ニテ 六社ノ宮トゾ祝ケル。毎年舊規ニ任セツツ 無言ノ祭ヲ企テ 土民是ヲゾ参拜ス。シカレバ国ニカクレナキ 十字ノ名号末世マデ 伝ル証拠ハ斯謂。厥外名号七代ニ タビ々奇特ノ有コトハ 数多ケレ

バ愚舌ニテ 申述モ恐アリ。九牛ガ一毛只是穴賢。

件之縁起者矢野教念祐念伝聞於異端遺言。予最雖詞拙是苟偏為智恩報徳染墨毫猶馮後見賢者之取捨愚案訛謬而已。

元久貳曆（一二〇五）九月下旬矢野兄弟住木子山畢

于時承応貳年（一六五三）正月廿八日書之

丹後半島の山中に隠れ住んだ平家の落武者矢野五郎・十郎の兄弟は、京に上って聖人の弟子（教念・祐念）となり、救いにあずかり、無上の歓びと生きる希望を与えられた。しかし、国もとへ帰って人々に本願念仏の教えを伝える布教の困難さも物語っている。旧来の神祇信仰を棄てて弥陀一仏に帰させることの困難さがこうした伝説を生み出したのである。名号が流れ着いた淵（鍋淵）の岩には十字名号（縦九五糎、横三五糎）が刻まれており、本年（平成二十三年、二〇一一）八月三日、教念寺門徒十名によって拓本に採られた。宮津市字小田の教念寺では、今も七月の第一日曜に「十字名号」を中央に、左右に「教念・祐念絵像」と「蟻卷名号縁起絵」を懸け、「鍋淵の報恩講」を営んでいる。なお、宮津市に隣接する丹波・福知山市夜久野町直見の本願寺派教蓮寺には、「身代りお齒黒の名号」の伝説が伝わっている。

結び

親鸞伝説は、親鸞を心から敬慕する人々の篤い思いが紡ぎ

親鸞伝説の性格と意義（菊 藤）

出した物語であるが、中には史実に基づいたものもある。人々はそれを読み聞くことで聖人と出会い、教えや宗風を身につけた。伝説から何を学び、それをいかに生かすかが重要であろう。

〈キーワード〉

親鸞伝説、『親鸞聖人霊瑞編』、蟻卷の名号、木子山十字名号之縁起

（京都短期大学名誉教授・文博）